英語科ペア学習の原則と工夫

ペア学習の極意は絆づくり

中嶋 洋一 富山・砺波市立出町中学校

なかしま　よういち　1955年生まれ。砺波市立出町中学校教頭。単著『英語のディベート授業30の技』『英語好きにする授業マネージメント30の技』（明治図書）、DVD『6-way Street』（バンブルビー）他。NHK『わくわく授業』出演。

❶ ペア学習はピア・サポート

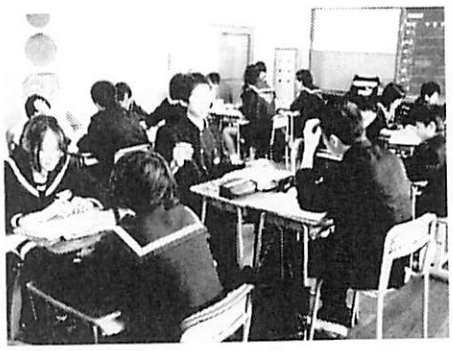
「一人の人間が育つには、村中の人の力が必要だ」と言われている。それだけ、かかわりをもつことが大切だということである。中でも、友だちや仲間の力は、大人のかかわりの比ではない。

本校の英語科は、5人の教師全てがペア学習に取り組んでいる。また、学習差のあるペア（リーダーとパートナー）をソシオメトリック・テストで選んでおり、目的に合わせてバリエーションを作っている。

例えば、下の写真でお分かりのように、女子2名、男子2名が基本ペアであり、2つのペアは兄弟ペア同士。普段は少しでも自立できるようにと離れているが、困ったときは協力し合う。

また、同質のレベル同士の学習が必要になる場合は、リーダー同士、パートナー同士で、さっと向きを変えて男女が向かい合う。

お世話をする、お世話をされる側は一方向でも構わない。その方が子供にとって居心地がいい。教師が「平等でなければならない」「協力し合わなければならない」という理想を押しつけると、子どもたちは逆に窮屈に感じる。



また、学校における学力の向上は「自己チュー」ではなく、互いに教えあい、友達のよいモデルをまねして、みんなでAランクになることだ。

教師やペアーリーダーは、命令、叱責、介入、横取りをしない。「スキル」を教え込むわけでもない。子ども自らが「コミュニケーションのスキル」を探し出し、その重要性に気づいていく。

教師は、それが実現するような場づくり、システムづくりの全体構想を練る。ペアリーダーは、パートナーの「意欲づけ」「事前準備」「予習」を行い、役に立つための方法を考える。パートナーの成就感がペアリーダーに自己有用感を与える。

❷ ペア学習の取り組みを実況中継で

筆者のペア学習の授業を、一人の参観者のレポートという方法でお伝えする。

3年生2クラスを参観した。一つは教科書の音読練習。もう一つは教科書の内容確認である。無駄がなく、どの生徒もやる気にさせ、確実にできるようにさせるための仕掛けがあった。ちょっとした工夫が印象に残った。以下は、そのレポートである。

(1) ペアによる教科書の音読練習

●自分の指導

①「読み終わったら立ちなさい。3回戦　までやります。1回戦よーい、始め」「勝った人は手を挙げて」

②「2回戦よーい、始め」「勝った人、手を挙げて」

③「3回戦よーい、始め」「勝った人、手を挙げて」「おめでとう、拍手！」

●中嶋先生の指導（消しゴムを使う）

①「なめらかに読めるように、ペアで1文ずつつなげて読む練習をしなさい」（一人が一文を読んだら、相手は0・5秒で次の文をつなげて読む。2人で最後までスムーズに読めたら、「診断的評価」に入る。

②診断的評価に入る。

ア　個人で音読練習（3分間）

イ　リーダーとパートナーで対戦

机を向かい合わせにする。真ん中に消しゴムを置く。中嶋先生の合図で、リーダーとパートナーが一斉に教科書の指定されたページ（単元の本文全部）を読む。

読み終わったらすぐに消しゴムをとる。勝者は全てペアリーダーになったことを確認した先生はパートナーに指示を出す。

「相手が終わったときに、自分の読んでいたところを指しなさい。最後まで残った行数を数えなさい。そして、その行数を最初から数えなさい。それが次回の対戦の時のハンデです。今から2分間、練習をします。そのハンデの分速く読めるようになれば勝てますね」

その後、大きな声で音読が始まった。

ウ　ハンデ戦

パートナーはハンデの分を読み終わった時点で、手にもっていた消しゴムを机の真ん中に置く。それがペアリーダーのスタート合図である。早く読み終わった方が消しゴムをとる。練習の時以上に大きな音読の声がクラスに響き渡った。

③速読に慣れたところで、兄弟ペアのリーダー同士、パートナー同士が向かい合って対戦する。ハンデはなし。

④他流試合…自由に席を替わって、自分が対戦したい友だち3人と行う。

⑤音読の有効性をデータで示す。

「なぜ、速読が大切なのか分かりますか」と中嶋先生は生徒たちに問いかけた後で、ある数値グラフを提示した。それは、1分間で音読することができる頁数と、リスニングテストの得点の相関関係を示したものだ。そのグラフは、速く読めるほどリスニングの点数は高く、遅くなるにつれてリスニングの点数が低くなっていることが一目瞭然であった。

それを見た生徒たちは、全てを理解しチャイムが鳴るまで大きな声で速読練習に取り組んだ。

(2) 教科書の内容理解

●自分の指導

本時で押さえておきたいところをプリントなどを用いて確認したり、一人一人指名して、答えさせたりしている。

●中嶋先生の指導

①ペアリーダー全員を廊下に呼ぶ。そして、次のことを伝える。

◆これから10分間はペア学習の時間であること。（小先生になること）

◆パートナーに、今日の頁のうちで重要と思われることを一方的に説明するのではなく、質問をしながら「へえー」「ああ、そうか」と気づかせていくこと。わかるようになったら応

用問題を与えること。

◆10分後、今日のポイントについて質問をするので、誰が当たっても答えられるようにしておくこと。

②ペアリーダーが教室に戻り、ペア学習を開始する。中嶋先生は、机間指導をしながら、上手な教え方をしているリーダーをさりげなく紹介した。

③中嶋先生が、クラス全体に今日のポイントを確認するための質問をする。そのなかで、Shall we～?とLet's～.のニュアンスの違いについてALTとの寸劇を通して指導した。生徒の中からは「あっ、分かった」という声が出ていた。

中嶋先生の指示や指導の一つ一つには意味がある。バラバラではなく、全てつながっていく。やらせっぱなしではなく、生徒の実態を常に把握し、次の一手を的確に打ち、ゴールに向かって詰めていく。本時の到達目標(評価規準)に近づけるためにさまざまな手を打っている。

中嶋先生の指導には、中途半端な優しさはなく、どの子もできるようになるまで何度でも繰り返す。指導技術ではなく、教師としての信念、「魂」が感じとれた。

❸ ペア学習に必要なのは教師の遊び心

ペア学習の機能を最大限に生かすには、教師の遊び心が必要である。この公開授業の次時は、次のような指示を出した。

> (真っ新な教科書をコピーして配る)
> 兄弟ペアのペア・リーダー同士、パートナー同士で、相手に問題を作りなさい。40点満点で、配点や観点も記入しなさい。
> (4観点は教師が板書する)

持ち物は、修正ペンと黒マジック。それで自由にテストのデザインをさせるのである。問題は後で消えないようにボールペンで書く。

作っている間に、教師が机間指導しながらアドバイスやチェックをする。作成時間は30分。30分経ったら、問題用紙を交換する。答えを書くときは鉛筆である。

解答時間は10分間。10分経ったら、再度交換して、互いに採点をし、コメントやアドバイスを書く。そして相手に返す。

例えば、ある文を「スラッシュで切りなさい」、「チャンクの部分を□で囲みなさい」、「反意語を書きなさい」といった自分なりに工夫された問題が出題される。これは、教師の普段の指導が影響を与えている。本文を訳させるような授業や、文法中心の指導ばかりしているようでは、問題も暗記中心の無味乾燥なものになりやすい。

一方、普段から行間を読み取らせたり、ト書きを入れさせたりしていると、深く読み取るような問題を作るようになる。入試の時にも、出題者の意図がくみ取れるようになる。

最後に、作った問題は教師が集め、いいものはコピーして次の時間で紹介する。このようにして、バー(自己指導能力)を高くしていくのである。

自分が分かっていないことは、人に説明できない。だから、筆者の場合、問題づくりは、本当に力がついているかどうかを見極める、大切な活動なのである。

一斉指導で、生徒が前を向いていると、教師は喋りすぎてしまう。

どの子も今の力に満足せず、さらによくなりたいと思うように、ペア学習の機能を十分に生かしていきたい。

そのためには、教師が自分たちで気付けるような場面を演出し、教師の指導や日々の活動を「細分化」していくことがコツであると考えている。